

派遣法改正・特集記事

“日雇い派遣”体験記

*この文章は、2008年8月25日～8月31日の間、「ロジラボ通信」に掲載したものです。

日雇い派遣体験記（１） - ターミナル駅に集合 -

先日、東京ベイエリアにある某大手路線会社のターミナル拠点に、日雇い派遣労働者として潜入してきた。以下、数回に分けて、当日の様子をレポートしたい。



派遣会社から指定された集合時間より早く最寄り駅に到着。仕事に入ったら、帰りまで喫煙できないだろうと思い、ホームにある喫煙所で一服。喫煙を終え、集合場所であるターミナル駅の時計台に行くと、同じ現場に出向くと思われる数名の人がいる。互いに、話をしていく風でもないので、取り敢えず、集合時間まで待つことに。

集合時間の13:00になる。すると、何処からともなく、点呼を取る派遣スタッフが現れる。年のころは二十代半ば。見るからにフリーター風のガッチリとした体格の青年である。その青年は、「社の方ですか？」と、派遣会社の名前を口にした。この行動から、派遣労働者が、自身がどこの派遣会社から派遣されてきているのかを認識することができる。

1名ほど、集合時刻に来ていないらしく、その場で待機することに。その間、携帯電話をチェックすると、派遣会社から着信があったことに気づく。そう言えば、出掛けに、派遣会社に一報を入れるように指示されていたが、仕事の電話に追われてすっかり忘れていた。即座に、派遣会社に電話を入れ、集合時間に間に合ったことを報告する。結局、1名は現れず、そのままバスターミナル側に移動することに。移動を始めても、集合場所に来た人たち同士の会話は無い。

ターミナル駅と並行して走る道路沿いには、既に、数十名ほどの行列ができています。この全てが同じ現場に行くのかと思いながら観察していると、1台のバスが目の前に止まった。このバスに乗るのかと思いながら、点呼役スタッフの指示を待っていると、何も言う気配はない。そのバスが出たとき、自分が乗るバスではないことに気づく。一時期、このターミナル駅が最寄りの会社に勤務していたが、この道路沿いが、各現場に行く人たちの乗降場所であることを知らなかった。

奏功するうちに、派遣先企業のキャラクターが描かれた1台のバスが遠くで止まる。出発時間数分前だったため、すぐに、乗るのかと想像していたら、出発時間調度に、エンジン

をかけ始め、目の前で止まった。バスに乗るために行列している人数を数えてみたら、40～50名。見たところ、約20%が女性である。このバスには、日雇い派遣労働者のみならず、物流会社直用のパート・アルバイトも乗るため、誰が、日雇い派遣会社から派遣されたスタッフなのかを特定することはできない。

バスに乗り込む人たちは、見たところ、幾つかのパターンに分類できると思った。一つは、フリーターのような感じの人たち、もう一つは、夏休み期間にアルバイトできているような人たち、そして、やや年配の人たち。それぞれ、見た目の年齢や服装、待ち時間の仕草から、“現場慣れ”度合いが醸し出されているように感じる。

前者は、特段、何をやる訳でもなく待っている人が多いが、後者は、手に参考書や趣味の本を持ち読むなどしている。ちなみに、当日の筆者の服装は、白いカーゴパンツに濃紺のポロシャツ。物流現場で働くには多少微妙な格好だが、仕事終了時に、どれくらい汚れるのかを測定し易くするために、敢えて、汚れが目立つようにしておいた。

13:33にバスが発車し、約20分ほど揺られてその日の現場に辿り着く。当日の現場である大手路線会社のターミナルは、物流倉庫が乱立するエリア。日頃、物流施設を回る筆者にとっては見慣れた光景である。現場に辿り着くと、全員が、施設2階にある「休憩室」に入る。休憩室に入ると、現場社員から、当日の就労状況を示す「就業確認書」を提出するよう促される。現場社員は、「確認書」と略して読んでいた。「就業確認書」には、作業日、氏名、(派遣会社の)登録番号、会社名(派遣先企業名)、作業予定時間などを記入するようになっている。仕事終了後、派遣先企業の印鑑が押された「就業確認書」を派遣会社に持っていき、報酬を受け取る仕組みだ。

休憩室で、就業確認書をもとに、作業現場の割り振りを行う。その際、現場社員が「今日が、現場はじめての人？」と声をかけ、現場に慣れた労働者と新参者のバランスを取りながら配置が決められる。

日雇い派遣体験記(2) - 大手路線会社のターミナルの現場 -

筆者の持ち場は、荷物を方面別に仕分けし、カーゴテナー(カゴ車)に積載する仕事である。筆者の他に、もう1名の未経験者の女性と、現場に慣れた直用スタッフの男性2名、女性2名の計6名で1つの現場(コンベア)を受け持つ。現場ごとに、現場企業の制服を着た社員がつく。年の頃は、筆者より4～5歳年下といったところだろうか。

この現場の仕事は、荷物に振られた数桁の番号（cf. - - ）を見ながらピックアップし、方面ごとのカゴ車に積載していくというものである。最初の二桁の数字は、主に、都道府県を指すもの（大都市の場合はこれが複数に分かれている）、次の二桁数字は、都道府県内のエリアを指すもの、そして、その後の数字は、更に細かなエリアや施設などを仕分けするための番号である。三番目の点は、千葉県エリアに配送される荷物を取り扱っている際、とある特定の数字が成田空港に行く荷物であり、別のカゴ車に積むように指示されたことから、特定のエリアや施設を意味するものではないかと解している。



構内放送とともに、方面別仕分けの作業が開始する。作業前に、現場社員から、特段、作業の説明も注意事項も無かった。ただ、「間違えないように」との指示があったものの、作業そのものを理解できていなかったため、現場慣れた他の労働者にアドバイスを請う。すると、荷物をカゴ車に積む場合、「奥の方から壁を作るように積むのがコツであること」を習う。荷物のサイズは大小異なり、また、必ずしも、大きな荷物から流れてくる訳ではないため、カゴ車の手前側に、大きな荷物が流れてきたときを想定して、広めのスペースを確保しておくことが上手く積載するためのコツだということである。

その他に、先輩労働者から「柔らかい段ボールの上にはモノを積まないこと」、「（紙袋に入れられたような）小さめの荷物は箱の間の空きスペースに入れること」などを教えてもらう。現場社員からは、各荷物に記されている「ワレモノ」、あるいは、「精密機器」などの取扱いに関する注意は一切ない。これは、実際のハンドリングも含めて、この現場に潜入した筆者が、最も、驚いたことの一つであった。

当初、筆者が担当していた仕分け先は2つ。おそらく、現場に慣れた労働者の配慮であろう。そのうち、筆者よりもラインの前の方に位置していた未経験者の女性の労働者のハンドリングが悪く、荷物が滞留してきたため、仕分け先が1～2つ追加される。仕分け機が動き出し、しばらくすると、ある程度、作業に慣れてきた。作業の合間に、他の持ち場や労働者の動きをよくよく観察すると、現場に慣れた直用のパート（女性）は、比較的、楽なポジションであるコンベアから当該エリアの荷物をレーンに流す位置を担当していることが多い。要は、熟練している労働者ほど、“手抜きのコツ”も熟知しているのだ。

一方で、その位置は、ある程度、"作業慣れ"も必要だと感じる。と言うのも、方面別仕分け作業は、約一時間ごとに、作業場所が変わるのだが、その際に、前述の未経験者女性スタッフがその位置についた際、荷捌きする荷物の滞留が多くなったのである。物凄いスピードで流れてくる荷物を一瞬で目視して流す作業は、未経験者には向かないのかもしれない。誤着（誤配）防止の観点からも、現場慣れした直用のパート・アルバイトが担当した方が好ましい持ち場であろう。

14:00から始まった作業時間で、結局、3つのエリアの方面別仕分けを担当した。最初に、千葉方面、次に、大阪・神戸・姫路などの関西方面、そして、再度、千葉方面を担当した。当日、とある大手通販会社の（小さな）荷物が大量にあり、カゴ車への積載に手間取ったことが印象的であった。また、3時間に及ぶ前半の作業時間中、持参した500ミリリットルのペットボトルは空になり、汗かきの筆者のポロシャツやタオルは、絞らずとも水滴が落ちるほど濡れている。

前半作業の終了時間は、構内アナウンスで知らされる。ひたすらピッキングとカゴ車への積載をする作業は、思いのほかキツかったものの、先輩の労働者からは、「今日は荷物が少ない方。この現場は、火曜日と金曜日の荷物が多くて忙しい」ことを教えてもらう。

前半作業は、肉体的な疲れよりも、汗だくになりながらの作業の不快感の方が際立つものであった。段ボールの独特のにおいと汗のにおいが相まって、自身の身体から何とも言いえない異臭が放たれていることに気づく。また、飲み物を持参していなかった未経験者は、さぞかし喉が渴いたことだろうと気の毒に思う。

日雇い派遣体験記（3） - 休憩時間に垣間見える真実 -

休憩時間に入り、まずは、休憩室にある喫煙室で一服する。手には、乾いた喉を潤すため500ミリリットルのコカコーラの缶。筆者は、あまり炭酸飲料を飲む方ではないが、一気に飲み干せるほど身体が水分を欲していたのだろう。一段落して、事業所にある食堂へと向かいカレーを注文する。空いている席に座り、早速食べてみるが、然して、驚沢している方ではない筆者にとっても、お世辞にも美味しいものでは無かった。

食事を終え、休憩室に戻る。時計の針は、17:30を指している。後半は、前半よりも一時間長い4時間労働のため、吸えるうちにと思い、再度、喫煙室へ。喫煙室では、労働者が、顔に疲労の色をうかべながら地べたに座り込む姿が目立つ。筆者も、少しでも休息できるようにと同様に地べたに座り込み、煙草に火をつける。すると、隣で煙草を吸っ

ている日雇い派遣労働者同士の会話が耳に入ってきた。一人は、25歳前後のフリーター風の男性、もう一人は話から学生のような様子である。

- 「（派遣会社）の支店は、この現場が多く、専用みたいになっている」
- 「他の現場に行くこともある。気分的には、複数の現場に入る方が楽。」
- 「駐禁対策のために、トラックの助手席に乗っているだけの仕事もある」



喫煙室を出て、休憩室に座っていると、バイト雑誌を見る直用アルバイトの姿が目に入ってきた。現場社員も使用する休憩室で、堂々と、バイト雑誌を読む姿は、筆者にとっては違和感を覚えるものであった。また、顔見知りの労働者同士が、シフトごとの仕事のキツさについて情報交換している姿もある。奏功しているうちに、夜のシフトの労働者が大勢休憩室へと入ってくる。仕草を見ると、この現場に慣れているような顔ぶれが増える。

後半の作業開始時間の18:00になり、スーツを着た社員らしき人物が現れる。その人物が現れ、現場監督者が労働者に声をかけると、一斉に、労働者全員が起立した。前半には、見られなかった光景である。夕方からの作業について現場監督から説明を受けたあと、スーツを着た社員から、幾つかの注意が行われた。以下、要点を抜粋する。

- 「この現場は、全国の現場で最も誤着が多い現場である」
- 「昨日は、105,000～110,000個/日の荷物のうち、誤着が72件あった」
- 「鹿児島島の荷物が青森に届くようなケースがある」
- 「一日、配送が遅れることで、受取人がどう感じるか考える」
- 「対価を受け取っている訳だから、「プロ意識」を持って仕事にあたって欲しい」
- 「労災事故には、気をつけるように」
- 「パート・アルバイトは、来月のシフトを急いで出すように」

注意事項を聞きながら、スーツ姿の社員の言わんとすることは解るが、現場改善コンサルティング会社勤務経験がある筆者にとっては、前半の現場の状況（労働者の配置）などから、「誤着」などの責任を労働者に求めること自体いかなげなものかと感じるとともに、具体的な改善策を示さない言動に違和感を覚えた。

と同時に、形だけ、「労災事故防止」と壁に貼られたスローガンを復唱するだけの指示からも、労働現場監督者の労働者の衛生・安全等に対する意識の低さをうかがい知ることができる。そのことは、今回の日雇い派遣の労働現場潜入の主旨からも、日雇い派遣労働者に対する労働法制上の責任を、派遣事業者（派遣元）に追わせることの法の矛盾を痛感した瞬間でもあった。派遣先企業社員がこのような意識では、派遣事業者に労働者の安全・衛生管理の対応を迫ったところで、結果は、推して知るべしである。

日雇い派遣体験記（４） - 現場社員に媚びる労働者の姿 -

休憩室で新しい配置を指示され、作業場へと向かう。後半の作業は、物流ターミナルに搬入された荷物を仕分け機（コンベアー）に投入する作業の担当になった。当初、荷物を置くだけかと簡単に考えていたが、後に、通称"流し"と呼ばれていた作業のキツさを見せつけられることになる。夕方からのシフトは、現場慣れしたような労働者が多く、と同時に、ヘルメットを着用しない姿が目につく。

持ち場につくと、早速、作業が始まった。作業内容が解らないので、隣にいた経験者と思しきアルバイトの人に作業内容を教えてもらう。この持ち場は、前述の数桁の番号を上にして、ひたすら仕分け機に投入するのが作業内容である。仕分け機が二つに分かれるため、投入する場所に一人の社員、仕分け機の分岐点に、もう一人社員がいる。筆者は、投入する場所を監督する社員の指示に従う様子である。やはり、ここでも明確な指示はない。現場監督社員は、前者が年の頃50代半ばの柔和な感じの社員、もう一人は、見た目は20代後半、お世辞にも、言動が上品とは言えないタイプの社員である。

仕分け機の前に位置する筆者の前に、次々と、荷物満載のカゴ車が運ばれてくる。カゴ車全面の鉄格子上の蓋を外し、カゴ車の側面または背面にかける。後は、次々と、仕分け機に投入していく。カゴ車の荷物には、正直、当たり外れがある。通販会社からの搬出物と思われる小口荷物は、数桁の番号が記載されている個所が同じで、荷物の重量が軽いいため、比較的、投入作業は楽である。一方、多種の荷物が混載されているカゴ車の場合は、大型で重量が重い精密機器やゴルフバックから、封筒に入れられた小口荷物まであり、荷物の形状や重さに応じて、投入作業の動きを変化させなければならない。勿論、荷物一個当たりを取り扱うスピードも変わってくる。

カゴ車2台分を仕分け機に投入した頃であろうか、荷物の中で、上部が開いた段ボールがあり、封筒に入った小口の荷物が多数入っていたため、一つずつ仕分け機に投入していると、仕分け機の分岐点にいる社員から、「何をやってるんだ。蓋が空いたものは、こっち

のコンベアに流せ！」と怒声を浴びせられる。作業前に、何の指示も受けていないため、当然、オペレーションの詳細を把握していない。怒鳴られてはじめてそのことを知る。「すみません」と大声で謝り、その場を受け流す。

しばらくすると、直用のバイトらしきフリーター風の男性が、ヘルメットに5～6本の缶ジュースを入れて現れる。気心が知れた感じで金髪の社員に笑顔で話しかけ、ヘルメットの中にある缶ジュースを渡す。金髪の社員は、ためらう風でもなくその缶ジュースを受け取った。直後に、そのバイトスタッフが、荷物が積まれたカゴ車を仕分け機の投入箇所まで持ってきて、空になったカゴ車を運んでいく、比較的、楽な作業に従事したことから、缶ジュースが、楽な配置に付くための"切符"であることを知る。

カゴ車を運ぶ作業をしているもう一人の労働者（直用のバイト）に至っては、作業が始まって、現場社員の目を盗みただうろつくだけ、社員の姿が現れると、やおら作業場に落ちているゴミを拾いだす仕草をはじめだし、改めて、社員の姿に気づいた振りをして、現場社員に指示を請う姿が印象的であった。カゴ車の運搬をしている労働者は、他の労働者が多忙を極めていても、基本的に、手を差しのべることはしない。しかし、現場社員の姿がある時は、全くその逆の対応をする。つまり、積極的に、サポートするのである。その様子を見ながら、このような現場にも、"世間の渡り方"があることを痛感させられ複雑な思いになる。

後半の作業は、4時間ぶっ通しで、ひたすら仕分け機に荷物を投入するため、前半と比べて、作業内容についての発見は少ない。強いて、感じたことがあるとすると、現場慣れしていない日雇い派遣社員の比較的丁寧な荷物の取扱い方と比べて、現場慣れしている直用のパート・アルバイトの荷物の取扱いの煩雑さであった。

とある時、現場の顔役のような大柄の労働者が、仕分け機を流れているゴルフバックを当該方面のコンベアに投げるシーンを見た。投げる際の力が強すぎたのか、ゴルフバックは、大きな音を立てて床に落ちた。以前、ゴルフクラブが配送時に折れたという人の話を聞いたことがあるが、「そういうことなのか」と驚愕した瞬間があった。余談ながら、今後、ゴルフバックを送ることなど無いだろう。

また、とある時には、カゴ車一杯にワインの箱が積まれていたが、そのカゴ車を担当する労働者は、特段、取扱いを気にする風でもなく、ワレモノシールが貼られたその箱を、放り投げる感じで次から次に仕分け機に置いていく。輸送時の取り扱いがこれでは、いかに、ワインパーで澱が立たないように丁寧に扱っても無意味だろうかと、感じてしまった。精密機器などの扱いも同様であるし、社員が、荷物の取り扱いを注意することなど皆無だ。

後日、この様子を、弊社内で報告したところ、それでも、その会社の荷物の取り扱いは、業界内では丁寧だと評判とのことであった。そして、この点は、潜入の主旨とは無関係に、筆者が、潜入して最も驚いたことの一つであった。とかく物流業は地位が低いと言われることがある。本来、サービス業であるにもかかわらず、実際の物流現場では、このような状況が横行している。そのことも、物流業、及び、物流業界で働く人の地位向上を阻害する遠因になっているのではないだろうかと思う。

日雇い派遣体験記（５） - 直用（アルバイト・パート）か、派遣か -

仕分け機投入作業に従事した後半の作業中、とあることを実験してみた。具体的には、現場に慣れた直用パートやアルバイトと、私のような日雇い派遣労働者で、オペレーション上の効率がどれだけ違うかという点についてである。何故ならば、ある一面において、労働者の雇用形態による物流企業の生産性の問題、更には、物流企業のあるべき雇用（労働）のあり方について、一つの指標になるのではないかと考えたからである。前日、とある物流企業経営者から、「派遣社員は、パートやアルバイトと比較して、ピッキングの効率が悪い」という話を聞いていたこともこの実験を行った理由の一つである。

実験方法は至って簡単である。無論、イコール条件ではないため、厳密な測定ではないが、似たような荷物、例えば、大手通販会社のカゴ車が運ばれてきたときに、仕分け機投入現場にいる直用のパート・アルバイト、派遣社員の作業効率を、目視ではあるが測定してみたのである。

筆者なりに、最も、作業行動に無駄がでないように、カゴ車の配置を考え、仕分け機投入箇所の間にある作業位置を取ってみる。この作業で確認する点は、投入時に数桁の番号を上向きにすることと、荷物に応じたハンドリング（ワレモノの取扱いなど）しかない。

近隣にいる労働者との相对比较でしかないが、前述のように意識をして作業にあたると、およそ、数十％程度、作業効率に違いがあるのではないかと感じた。そのことは、カゴ車が空になるスピードと関連する。そして、見る限りにおいては、直用パートやアルバイトと、派遣社員の差はない。寧ろ、"力の抜き方"を心得ている直用スタッフの方が、作業効率が悪いのではないかとさえ感じる。特定の作業現場の、特定の作業の事例でしかないが、雇用形態を問わず、作業効率のようなことを考えながら作業をしている労働者は皆無なのである。

この点は、筆者にとっては重要な意味があった。何故ならば、昨今、日雇い派遣制度の議論が行われているが、行政やメディアで散見される議論とは、全く別次元のステージで現実が存在していることを見せつけられたからである。昨今の社会の風潮として、「非正規社員を正規社員に」、あるいは、「日雇い派遣労働者を直用のパート・アルバイトに」と言ったものがあるが、所詮、それらのことは、現場を知らない識者の机上の空論である。物流現場で垣間見られる労働者の意識には、人生設計やキャリアパスに対する向上心、あるいは、俗に言うところの"生き方"のようなものを感じるケースは少ない。より、端的に言えば、それ以前の問題として、「目先の生活に追われる」、あるいは、「今日を過ごす」と言ったことで手いっぱいなのである。



後半に任された仕分け作業への投入作業（流し）では、カゴ車の入れ替え時しか一息つく時間はなく、持参した 500 ミリリットルのペットボトルも最初の1時間で飲み干してしまうほどの暑さであった。残り3時間、一滴の水分を補充することもなく続ける作業は、疲労を通り越してナチュラルハイになりそうな重労働であった。投入作業を頑張った結果、終了予定時間より15分ほど早い21:40に作業を終えた。その時、年配の現場社員からかけられた「暑いなかお疲れさま」と声をかけられ、「作業も早くて助かったよ。ありがとう。」と言ってもらえた。素直に、嬉しかった。

日雇い派遣労働に関する報道において、様々な日雇派遣労働者の声を見聞きするが、派遣先の現場の印象は、このような派遣先企業の社員の人となりに拠る部分も大きい。

日雇い派遣体験記（6） - 日雇い派遣現場で見る“夢” -

作業を終え、荷物をおいている休憩室に戻り、隣部屋の事務所に赴き、派遣先企業の押印がある「就業確認書」を受け取り、バスに乗り込む。隣に、スーツ姿の20代の男性が座る。聞けば、勤務している会社の賃金が安く、夕方から夜まで、日雇い派遣の現場に出ているのだと言う。

道路が混雑しておらず、行きよりも早く待ち合わせ場所となったターミナル駅に辿り着く。バスに乗っていた労働者は、到着と同時に、三々五々、帰路につく。ロータリーにある喫煙所で一服し始めたとき、「女子ソフトボールがオリンピックで金メダルを獲った」という号外新聞が配られていた。関心はあるものの、疲労困憊のため、号外新聞を取りにくい気力はない。

オフィス街が隣接するターミナル駅だけに、11時前の駅構内は、スーツ姿のサラリーマンと綺麗に着飾ったOLの姿が目立つ。紙片にまみれたポロシャツを着て、汚れだらけのパンツをはいている姿をショウウィンドウで見たとき、「知り合いに会わないだろうか」、そんなことを気にする自分がいることに気づく。

ホームに降り、居住する横浜行きの電車に乗り込む。ドアが閉まった瞬間。汗かきの筆者は、自身の身体から、段ボールと汗が混ざり合い発酵したような異臭を放っていることに気づく。扉近くに立っていたが、自身の周りに人がまばらであるような錯覚に陥る。近くの席に目をやると、座席に座るOLがハンカチで鼻を押さえている。しかし、その理由が自身にあるのか確認する術はない。思い込みかもしれないが、心なしか、惨めな気持ちになる。

次の駅で、近くの座席に座っていたサラリーマンが降り座席が空いた。いつもなら、すかさず座るところではあるが、身なりが汚れた自分が座席に座ってはいけないのではないだろうかという気持ちになり、座席に座ることを断念した。そして、あまりのキツさに、扉付近の床に座り込んでしまった。最早、服装が汚れることなど気にならない自分がいた。

毎日、何気なく通る横浜駅構内。疲れ切った身には、周りを眺める余裕はなく、重たい体を引きずるように自宅へと向かう。帰宅後、当初、着衣の汚れを撮影し、本レポートに利用するつもりだったが、何故だか、そんな気分になれなかった。汚れた衣服を脱ぎ棄て洗濯機に投入し、そのままシャワーを浴び、いつもより入念に体を洗った。そして、腕中にサロンパスを貼り、即座に、床に入眠りについた。

その夜、“夢”を見ることもなく・・・。

日雇い派遣体験記(7) - 日雇い派遣現場で感じたこと -

日雇い派遣現場への潜入は、多くのことを考える貴重な機会となった。そして、改めて、メディアや官僚、学識経験者が行っている「日雇い派遣禁止議論」に疑問を感じている。法制度議論である以上、致し方ない側面はあるものの、日雇い派遣労働の現場を経験することなく語られる「～べき論」に空虚ささえ感じる。

日雇い派遣潜入の主旨に鑑みれば、率直に、派遣事業法自体の矛盾を感じる。その矛盾の最たる点は、派遣元事業主(派遣会社)だけに労働者の安全・衛生管理責任を負わせることである。こと物流業界に限って言えば、たとえ、派遣事業者が労働者の地位向上等に努めたとしても、労働者を受け入れる企業の意識が変わらなければ、法改正が行われたと

しても、仏作って魂いれず、そんな気がしてならない。真に、労働者の地位向上を考えたとき、派遣事業法により、派遣先・派遣元という概念から脱することができず、元請責任を問われない企業が現存することに、苛立ちさえ覚える。

一方で、休憩時間や作業時間に交わす日雇い派遣労働者との会話から、企業への常態雇用を求める声はなく、寧ろ、複数の現場に入ることを希望する現実があった。それが、様々な企業の現場を体験することで、自身のキャリアを模索しているのか、それとも、現実から逃げているのか、うかがい知るよしもない。ただ、一点だけ、言及するならば、「日雇い派遣」に限らず、「日雇い」の仕事（含む、直用のパート・アルバイト）を求める労働者の声は確実にあるという事実が存在することである。

また、物流企業における一般論として、派遣労働者よりも直用のパート・アルバイトの作業効率が高いと言った声があるが、専用センターなどのルーティーン且つ専門性の高い現場ならまだしも、作業の汎用性が高い現場においては、必ずしも、そうではない一面があることは発見だった。端的に言えば、"現場慣れ"ゆえの"手抜き"の効率化である。そのことは、雇用形態を問わず、労働者の教育・訓練の重要性を赤裸々に示しているとも言える。

ゆえに、物流現場で働く全ての労働者（日雇い派遣社員・パート・アルバイト）に対して、教育・訓練を行うことこそ、唯一、真に、現場で働く労働者の地位向上に寄与するものではないかと痛感する。

そんななか、悪の権化のごとく評される日雇い派遣事業者のなかに、労働者の教育訓練に力を入れ、派遣先である物流企業にコンプライアンスの重要性を説く姿が見られ始めたのは、大手メディアが語らない、光明であると言える。お世辞にも、労働現場の意識が高いとは言えない物流業界において、派遣事業者に改革の一步先を行かれていることを、多くの物流企業は猛省すべきである。

しかしながら、極めて残念なことに、多くの物流企業には、労働者を集めるノウハウはない。何故ならば、物流現場への派遣が解禁されて以降、そのことをおざなりにしてきたからである。だとするならば、未だ、物流業界に多段階構造（多重構造）という致命的な構造的要因が残されてはいるものの、人を集めること、労働者を教育訓練すること、コンプライアンス遵守に努めることに尽力してきた派遣事業者の叡智を活かす形で、新しい、物流現場の労働の在り方を、派遣事業者ともに模索していくべきであろう。

最後に、嘗て、業務改善のコンサルティング会社に所属した身として、労働者の心情を押し量ることもなく、「ABC分析」、あるいは、「行動分析」などを語っていた自身を恥ず

かしく思う。そして、真に、物流企業の業務改善（現場改善）を行うとするならば、物流現場で働く社員の教育・訓練、人格形成は不可欠な要因であり、そのことを考慮せずに、机上の空論だけで"改善"を語っていたことを省みる機会となったことは、自身の視野を広げる意味でも、大いに意義深い経験となった。

今後、秋の臨時国会において、日雇い派遣の原則禁止を柱とする派遣事業法の改正が行われるが、政治家、官僚、学識経験者、大手メディア・・・、関係する一人でも多くの人に、自ら日雇い派遣労働の現場に足を運び経験してもらいたい。事実を直視することからしか、本当の解決策は見いだせない。

近江商人の言葉に、「三方よし」という言葉がある。「労働者」、「派遣会社（派遣元事業者）」、「企業（派遣先事業者）」、このいずれかしか報われないような"労働者の在り方"は存在しない。関係者全てが叡智を結集すべきときである。そのことを結びの言葉としたい。

以上、「日雇い派遣体験記」終わり。

【著者プロフィール】

延 嘉隆（のぶ よしたか） ㈱ロジラテジー・代表取締役

1973年(昭和48年)8月2日産まれ。福岡県久留米市出身。青山学院大学経営学部卒業。大学在籍時の研究テーマは「物流二法(貨物自動車運送事業法・貨物運送取扱事業法)」。大学卒業の後、二人の自民党幹事長（加藤紘一・山崎拓）の秘書を経て、株式会社船井財産コンサルタンツ（企業再生・M&A・事業承継・相続・不動産証券化等/コンサルタンツ）。株式会社日本ビジネスクリエイト（業務改善・SCM/コンサルティングプロデューサー）。その他、インターネットマーケティング会社（顧問）。過去に、「賢者の選択」（BS朝日）プロデュース&ファシリテーターを務める。プライベートブログ「延 嘉隆（のぶ よしたか）のストリートスマート宣言！」では“爽やかに”社会を斬る。また、コンテナ・港湾写真家として、本牧（神奈川県横浜市）を中心に活動している。

【ストリートスマート宣言！】 <http://www.nobuyoshitaka.com/>

【コンテナギャラリー】 <http://container-gallery.jp/>